

## 『新出生前診断を考える』 講演会開催

七月四日、東京秋葉原のダイビル五階カンファレンスフロアにおいて標記講演会を開催した。本会加盟団体人権担当者及び一般参加者マスコミを合わせ約百二十名が参加した。

本年四月から運用が始まった新出生前診断は、簡単な血液検査だけで胎児の異常を妊娠初期に知ることができる画期的な方法である。その一方、「いのちの選別が進むのではないか」と危惧する声もある。そこで本会は、この問題を入権・生命倫理の見地から非常に大きな問題と捉え、私たちが未来へ向けて進むべき道を一般参加者と共に考える事を目的として、本講演会を開催した。

定刻の午後六時に開会した講演会は、最初に本会の小林正道理事長から開会の挨拶が行われ、講演に移った。講師及び講題は、吉村泰典氏（慶應義塾大学医学部教授）「出生前診断を考える」、柘植あづ

み氏（明治学院大学社会学部教授）

「出生前診断における女性の選択とはなにか」、村上興匡氏（大正大学文学部教授）「大学生と考える出生前診断」である。三名の講師はそれぞれ三十分の持ち時間の中で、専門的な見地より、豊富な資料とわかりやすい解説で講演された。

講演終了後、休憩をはさみ、後半は参加者より寄せられた質問をもとに、三名の講師が各々の考えを述べた。その中に三名の講師に対し共通の質問として、「新出生前診断で苦悩する方々に対し宗教者ができることや役割、又は期待することを一言お願いします」という問いがあった。これに対し、吉村教授は「期待することは大変多いが、ダウン症や中絶問題について医者は結論を出せない。異常が出た時にどのようにクライアーントに対応していったら良いのか。遺伝カウンセリングはできるが、

心理カウンセリングその他の心の支えはなかなかできない。医療者側が本当の意味で患者の支えになれるかは難しい」と述べ、宗教者に期待を寄せると同時に個人的には教えを請いたいという思いを語った。柘植教授は、出生前診断の経験を誰にも話せないという女性の事例から、「北米の教会のように誰にも言えない話を聞いてくれる機能を期待したい」と述べた。

僧侶でもある村上教授は、宗教者の立場から、訪れた福島での先達の方の傾聴体験をもとに、「宗教者はお説教をすることではなく、困っている人達が本当に欲しい言葉を見つけてあげること。苦しんでいる方々に形を与えてあげることが一番大切なことであり、そのよくな方を私は『仏教ソムリエ』と呼んでいます。あなたが欲しいのはこれですか、と言ってそっと差し出す。そんな風になれたらいいな」と思いつつ、大学での命の教育や命の授業に取り組みたい」と答えた。

閉会にあたり、本会の関崎幸孝

事務総長は、参加者に対する挨拶の中で、聴講の御礼とともに、「講演会だけでは結論の出ない難しい問題ではあるが、障害をもった方が暮らしにくい社会環境が、この問題の根っこにあるのではないかと問いかけ、「今後とも皆様と共に、宗教者もこの問題に取り組んでいく必要があるのでは」と結んだ。



講演会の様子